

---

# 大切な形

かぼす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大切な形

### 【Zコード】

N8041I

### 【作者名】

かぼす

### 【あらすじ】

信長と光秀の信頼関係が深まる中家康の陰謀が渦巻く。

## ひとつの眞実

### 序章

#### 出会い

「光秀殿」一人の獨特な装束を着た男は急いだ様子で言う。その声の先にいたのは明智光秀、彼は冷静な様子で「何かあつたのか。」と彼に問い合わせる。

光秀の態度は家臣に対しては丁寧すぎる対応だった。「尾張で有名な信長公が城に」彼は息を切らしながら報告する。

当時無名であつた明智家にとつて大変衝撃であった。「皆、無礼の無いように」と光秀は促す。その後信長公が登城し城に緊張が走る、これが2人の初めての対面であった。

「おぬし、わしの、織田家の仕官になる気はないか」突然の誘いに光秀は啞然とする。だが要件は続く

「わしは、今となつては実力派と呼ばれもするが、家が小大名、その時わしは光綱殿に拾つていただいた。「お父様が?」

「そうだ、だが、だからお前を家臣にしようと思つてゐるわけではない。一度会いたいと思つてゐたが予想通りまつすぐな眼をした男だ、悪い話ではないと思うがな。」

光秀は少し悩んだが答えを返した

「その、お言葉をありがたく頂戴したいところですがうちには70の兵がいます、彼らは私が城を離れるとき飯を食つていくことができないのです。」

彼の家臣の中には光秀を織田家にと考へる者が多かつたが彼は思ひを変えなかつた。すると信長は

「うちには3000の兵がいる、3000がいくつになろうが変わらぬよ」光秀は信長のイメージを取り間違えていた。

「魔王」という呼び名があるくらいなのだから冷酷な人なのである

うと思つていたが信念を持つ彼に惹かれつづいた、しかし家臣」と織田家に入れるなど、とう彼に疑いの思いもあつた。

光秀は彼に探しを入れた

「なぜ、私にここまで」

「なぜだらうか、わしにも分からぬ、なぜだかお前に光を感じるのだ」

その言葉に光秀は何も言つことができなかつた。ただ器の大きい人だと、できることならあのお方についていきたいとそう思つた。

「どうするのだ」 信長は最後に一度だけ確認をした。

「できることならば、一生この光秀が信長様の近くに、よろしく頼み申す。」

「様」などとそんな堅苦しい言葉はよせ、信長でよい「ならばせめて「殿と呼ばせて下せ」」「好きにせい」 光秀は目線をある若者に向け呼ぶ

「こちらが家臣で側近の佐吉でござります。」

光秀は初めて彼の、いや佐吉の紹介をした。

その後も会話が続き信長は

「ひと月後城で待つている」と言葉を残し城を去る

そして信長が去つた後、城には喜びの声が響き夜が明けるまで宴会が続いた。 第一章

登城、その後

信長の登城が有つてから1月彼らはそれぞれ思いを固め身支度を始めた。中には断るものもいたが信長に付いていくと決めた光秀にとつては仕方のないことだつた。結局残つたのは57人その中には側近の佐吉や光綱の時代から明智についていた軍師の武田六之助もいた。そして今日は登城の日、そして彼らの迎には羽柴秀吉が直々に迎え出た。皆から評判のいい秀吉だったが光秀は彼に対し嫌な感じを感じていた。

秀吉に城を一通り案内をされ信長のもとに行つた。

「失礼いたします。光秀でござります。これからよろしくお願ひい

たしまする。」

そういうと信長は

「そう硬くなるな、樂にせい」と言葉を発し

「それぞれ部屋を用意してゐる。分からぬことがあればそこへいる猿に聞いてくれ、そう言葉を残し自室に戻つて行つた。

彼らもそれぞれ自室に戻り、ある者は眠りにつき、ある者は城を回ることにした。

光秀は自室で考え事をしていた。彼に、いや信長公についていくと決めたものもやはり彼の意図が気になつて仕方がなかつた。

「ただの手駒かそれとも」

そんなことを考えていたらついには日が暮れてしまった。すると飯の号令が

掛り集合することにした。そこには大広間と豪華な飯そして多くの織田家の武士がいた。

100すらも家臣がいなかつた光秀にとつてはただ、ただ驚くしかなかつた。側近の秀吉、偶然城に来ていて同盟を結んでいた浅井長政と妻で信長の妹である市。光秀は彼らに軽く会釈をし自室に戻り就寝した。

翌日彼は、辰の時

「5時」におき鍛練、愛馬の世話をおこなし朝食をとりさつそく城での仕事に取り掛かつた。城の中には信長に引き抜かれた光秀を悪く思うものもおりすぐに根も葉もない噂話が飛び交つたが。本人はあまり気にしておらずが中には反織田派の勢力があるとの噂も飛び交つた。

信長はこのことを気にとめてはいないが

「猿」いや秀吉はこれを良しとせず、信長にも秘密裏にある計画を進めていた、その名も狐狸狩り（狐の妖怪狩り）

この計画はのちに歴史として語り継がれることのない物となりました。狐狸狩り計画が動き出してから三ヶ月織田軍は今川義元が率いる五万の兵を破り、知らぬ人はおらぬくらい有名になつた。光秀も

この戦で名を上げついには織田家仕官及び秀吉と共に信長の側近につきその名をじらし始めた。第二章

狐狸狩り今川との戦から半年が過ぎた。

光秀を悪く思つるのは増加の一途を辿りついたは光秀の暗殺まで囁かれた。

そのことに憤れを切らした反織田派、いや光秀の家臣が織田家のものに罵声を浴びせた事をきっかけに明智派と織田派の対立が激しくなった。

そしてその夜ついに何者かによつて明智派の者が暗殺された。さすがの信長もこのことに對しては無視することができず、光秀を呼び出し会談をした。「信長様、私の出世を良く思わない者が多いようです。このままでは信長様の迷惑になってしまいます。なので私を仕官からぞして側近からおはずし下さい」

この言葉に嘘はなかつた。「お前はそれでいいのか」信長は止める止めるというより光秀の意思に任せることにした。というより光秀の意思に任せることにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8041i/>

---

大切な形

2010年10月13日17時45分発行